

シリーズ「遺跡を学ぶ」

172

古代東アジア 外交の玄関口

鴻臚館

菅波正人

新泉社



古代東アジア
外交の玄関口

— 鴻臚館 —

菅波正人

【目次】

第1章 「幻の鴻臚館」 発見 4

1 幻の鴻臚館 4

2 鴻臚館の発見 13

第2章 外交の最前線・筑紫 17

1 筑紫大郡の登場 17

2 筑紫館の登場 22

第3章 姿をあらわした鴻臚館 26

1 鴻臚館の時期区分 26

2 筑紫館の成立…第Ⅰ期（七世紀後半～八世紀前半） 28

3 筑紫館の整備…第Ⅱ期（八世紀前半～末） 34

4 鴻臚館の登場…第Ⅲ期（九世紀初頭～後半） 42

5 唐物交易の場…第Ⅳ期（九世紀後半～一〇世紀前半） 47

6 鴻臚館の廃絶…第Ⅴ期（一〇世紀後半～一一世紀前半） 50

7 鴻臚館の食料供給 54

第4章 鴻臚館と古代の外交 65

1 筑紫館の新羅外交 65

2 唐物交易の時代 70

3 鴻臚館から博多へ 81

第5章 アジアの交流拠点・福岡の原点 87

参考文献 92

編集委員
勅使河原彰（代表）
小野 昭
小野 正敏
石川日出志
小澤 毅
佐々木憲一

装 幀 新谷雅宣
本文図版 松澤利絵

第1章 「幻の鴻臚館」発見

1 幻の鴻臚館

幻でなくなった！

「平和台球場で見つけた 大和朝廷の迎賓館 鴻臚館」(図1)

「出た！大和朝廷の迎賓館」

「やはり鴻臚館跡」

「唐代青磁も出土 古代外交史に物証」

一九八七年一月二十九日、「鴻臚館跡」発見を大きく伝える新聞各紙の見出しである。

当時、発掘調査を指揮した福岡市埋蔵文化財課係長の折尾学は取材に対して興奮気味にこう答えている。

「幻だった鴻臚館が幻でなくなった！」

鴻臚館とは

文献のうえで「鴻臚館」は、平安時代はじめ、海外から来朝した使節や日本から海外へ派遣する使節のための客館として登場する。その名称は、中国の唐代にあった外交使節の接待施設「鴻臚寺」に由来する。鴻臚館は一つではなく、平安京・難波津・筑紫におかれていた。その

うち筑紫の鴻臚館（以下、たんに鴻臚館とする）は、大宰府の外港である博多湾に面した場所にあったであろうことは文献からわかっていった。しかし、後世に建設されたさまざまな施設によって破壊され、実態がわからないまま消えてしまった「幻の遺跡」である、長い間、考えられていた。それが、一九八七



図1 ●発見直後の発掘現場

貴重な発見を調査担当者の説明を受けながら見学する人びと。
現場の周囲には野球場外野席のフェンスや広告看板がみえる。



図2 ● 鴻臚館跡と周辺の関連遺跡

古代の博多湾は大宰府の外港であり、その水際におかれたのが鴻臚館である。大宰府とは官道で結ばれ、遺跡の周辺には鴻臚館に関連する役所や生産遺跡が分布する。

年、平和台野球場の改修工事中に姿をあらわしたのである。

鴻臚館の前身は、『日本書紀』持統天皇二年（六八八）二月の記事にはじめて登場する「筑紫館」だとされる。西海道（沖縄を除く現在の九州地方）で「蕃客・帰化・饗識」（外国使節、帰化志望者の管理・監督、外国使節のもてなし）を担う大宰府の管理下におかれ、外交施設として使節の迎賓などをおこなった。さらに対外関係の変化にともない、交易や博多湾の防備など多岐にわたる役割を担うことになる。

一〇四七年（永承二）に焼失するまでの約三五〇年間、鴻臚館は、新羅や唐などからの外交使節や遣新羅使や遣唐使、商人などが行き交う、東アジアと日本の結節点であった。

中山平次郎による所在地比定

江戸時代以来、鴻臚館は現在の博多駅周辺に存在したとされていた（図2）。福岡藩の儒学者・青柳種信は、「鴻臚館の在りし所は今の官内町と云所なり」と記している。官内町は現在のの中呉服町（福岡市博多区）付近をさす。種信の子の長野種正も「博多鴻臚館考」で、「此館址博多の内何処にありと云うは詳ならざれど」としながらも、「もしくは今堅町と云う是館町の遺名ならんか……または官内町……」と推定している。また、種信の弟子の伊藤常足も、その著『太宰管内志』のなかで「館ノ趾必博多官内なるべくおもわる」としている。いずれも「館＝カン」の音韻と地名の類似を根拠とした所在地比定であった。

これに対して異を唱えたのが、九州帝国大学医学部教授であった中山平次郎である（図3）。

中山は少年時代に読んだ弥生町貝塚の報告をきっかけに考古学に興味をもち、遺跡に足しげく通うようになる。代々医者の家系に生まれた中山は、東京帝国大学医学部を卒業後、西ヨーロッパへ留学するなど一時的に考古学と遠ざかるが、一九〇六年（明治三九）に福岡医科大学（のちの九州帝国大学医学部）に赴任すると、ふたたび考古学と深くかわることになる。彼は少年時代より培った徹底した現地踏査・表面採集をもとに遺跡の立地や遺物を検討し、文献史料との関係から古代社会を解釈する方法で研究をおこなった。

鴻臚館は福岡城内に？

中山は、鴻臚館に併設されていた警備の部署である「博多警固所」の位置を地名や一〇一九年（寛仁三）に賊船が博多を襲撃した刀伊の入寇の記述などから検討した。さらに、『万葉集』の歌がよまれた場所に着目する。

七三六年（天平八）六月、難波津から出航した遣新羅使たちが海路の途中でよんだ歌が『万葉集』に収められている。そのなかに、秋を迎えるころ、鴻臚館（当時は筑紫館）でよんだ歌がある。

志賀の海人の一日も落ちず焼く塩の辛き恋をも我はするかも（巻一五―三六五二）

今よりは秋づきぬらしあしひきの山松かげにひぐらし鳴きぬ（巻一五―三六五五）

神さぶる荒津の崎に寄する波間なくや妹に恋ひ渡りなむ 土師稲足（巻一五―三六六〇）

前二首は筑紫館に到着し故郷を思つてよまれたもので、最後の一首は筑紫館近くの海辺で月を眺めながらよまれた九首のうちの一首である。

中山は、「志賀の海人」などから志賀島が眺望できる場所、「山松かげ」のひぐらしの鳴き声が聞こえる場所は博多駅周辺にはないと考えた。そして、「荒津の崎」は博多から西に三キロほど離れた場所にある福岡藩の居城、福岡城の北側に位置する荒津山をさすことから、筑紫館の所在地を福岡城内と推定したのである。

当時、福岡城内には歩兵二四連隊兵営があった（図4）。そこで中山は、自身の推論を実証するため、一九一五年（大正四）、市民に城内が開放される「博多ドンタク」の二日間を利用して兵営内を調査し、兵営構内の武器庫、被服庫、火薬庫周辺で瓦を採集した（図5）。それらの軒瓦や縄目叩き、格子目叩きが施された瓦は奈良時代から平安時代のものであった。いずれも鴻臚館の存続期間に該当し、中山の推論を裏づけるものであった（軒瓦はのちに小田富士雄が「鴻臚館式」と命名することになる）。

この中山の調査により、鴻臚館は福岡城内に存在していたという説がもっとも妥当と考えられるようになった。



図3・中山平次郎（1871～1956）
中山は鴻臚館跡以外にも板付遺跡、今山遺跡、元寇防塁などに関する論文をつぎつぎと発表した。

戦後になると、中山が推定した鴻臚館跡は競技場建設などで破壊の危機にさらされることになる。一九四八年、福岡国民体育大会のため、兵器庫、被服庫跡地一帯はサッカー競技場として造成され、翌四九年から市民球場への改造工事がはじまった。この球場が「平和台野球場」である。一九五一年、平和台野球場南側のバレーコート造成工事の際には、九州文化総合研究所が主体となって、鏡山^{たけし}猛を中心^{たかし}に岡崎敬、渡辺正^{しろうさ}気らが発掘調査を実施した。ここでは、鴻臚館の遺構と考えられる礎石（図6）や奈良・平安時代の瓦、陶磁器類などが出土した。一九五四年、球場にナイトゲーム用の鉄塔を建設する際にも、福岡城の重臣屋敷の礎石や古代の瓦をふくむ築城時の整地層などが確認された。一九五七年に福岡城跡は国史跡に指定されたものの、野球ブームと西鉄ライオンズの黄金期で、球場の大規模な改造工事があいついだ。

平和台と鴻臚館

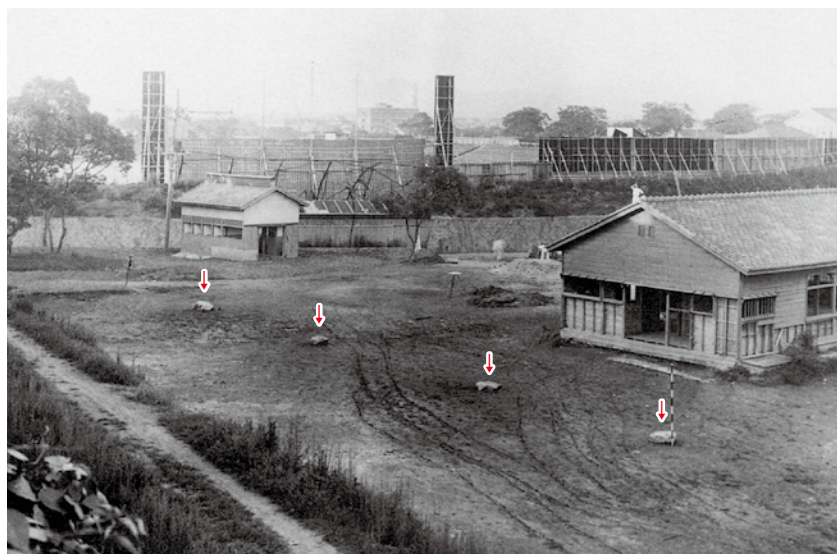


図6 ● 1951年の第1次発掘調査風景

調査では礎石列を確認（矢印）。後におこなわれた確認調査により、第Ⅲ期の建物であることが判明（図27参照）。奥にみえるのは平和台野球場の外野フェンス。

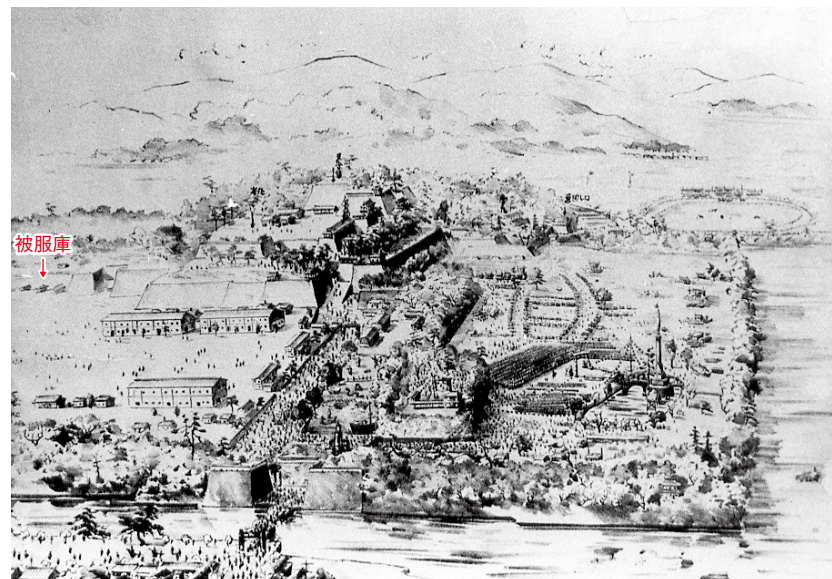


図4 ● 福岡第24連隊全景

1986年（明治19）、福岡城に設営された陸軍の施設で、中山が瓦を採集したのは、図の左端中央付近。そこは江戸時代の三の丸東側の重臣屋敷地。図には被服庫が描かれている（矢印）。



図5 ● 中山平次郎が採集した瓦の拓本

中山が福岡城内で採集した鴻臚館式の軒平瓦の拓本。1915年（大正4）に採取したものと翌年に採集したもの。